下伊那出版事情（盛衰史）稿

◎自由民権と印刷所

上川路村の庄屋（後に戸長）としての立場から、上川路、下川路、時又、長野原、桐林、駄科の6耕地総代として、明治政府の地租改正に対する地価軽減運動に取り組む中で、森多平が地方新聞の創刊を決意したのは明治14年の新春であった。その後ほぼ1年をかけ当局や当地での根回しを終え、11月12日慶應義塾で福沢諭吉とともに演説会に臨んでいた三輪信一郎を説得して主筆に据え、伝馬町専照寺内公道社で「深山自由新聞」創刊号を発行したのは、明治15年1月9日であった。

多平は深山自由新聞をゆくゆくは「自由新報」（印刷長北島翁輔、編輯長福島孝一）と「深山新聞」（印刷長兼編輯長小木曽良太郎）に分けて発行する計画を持ち、実際に内務教山田顕義に発行願いを提出している。自由新報の編輯を小室重弘（元団々珍聞記者・「自由の歌」作者。後に信中新報入社）に、深山新聞は坂田哲太郎に担当させる考えであったようだが、これは実現しなかった。

度重なる発行停止に経営難が続き、翌16年4月24日107合で「深山自由新聞」は廃刊を余儀なくされた。

坂田は廃刊と前後して結成された愛国正理社（社長桜井平吉）の総裁に就任、ほどなく26歳の若さで亡くなったが、その社員村松愛蔵・八木重治が飯田・名古屋・岡崎の3カ所で明治政府に対して挙兵計画準備したとして、同じ年の11月桜井らが逮捕される。世に言う「飯田事件」が発覚した。自由民権運動が地方小地主の利益獲得運動から平民の自由獲得運動に移行していく象徴的な事件であった。

運動に対する官憲の監視・弾圧の強まる中で、注目したいのは「深山自由新聞」創刊を支援した地方人や、それを契機に飯田に集まってきた一連の自由民権運動家たちの、の、その後の動向である。

明治16年には諏訪新聞主筆として飯田の地を踏んだ星野三郎（旧加賀藩士・大日本実行会下伊那支部幹事）が江戸町で活版印刷所を開く。

明治24年には賛同者のひとり、鼎村の中島徳三郎が伊那同志会の支援を受けて「伊那公報」（～明治29年3月）を創刊したが、51人の出資者のうち16人は深山自由新聞発行に際して株主となった人たちだった。その発行兼編集人は印南増五郎である。

「深山新聞」編輯長に擬せられていた小木曽良太郎は、明治26年「南信日報」の発行人となり、その後、健良舎を興し文芸誌『華壇』（明治40年10月～）などを創刊していく。

「伊那公報」とともに影響力があったのは、明治33年2月創刊の下伊那青年会の機関誌『伊那青年』（明治36年2月）で、これは明治40年10月創刊された北澤静香主筆の『南信雑誌』（～明治42年7月印刷は原四郎）に引き継がれていくかにみえるが、どうだろう。

伊那広報社出版の『飯田町史』(S.12.7)

しかしなんといっても明治35年1月に創刊され、昭和13年12月まで続いた日刊紙「南信」の影響は大きかった。中央紙の購読者もあったが郵送で到着まで数日かかったし、「伊那公報」や『伊那青年』は月2回もしくは月刊であったので、地域の日刊紙「南信」の強みは圧倒的であった。

時に国際関係・国体を論じ、地方行政に棹さし、俳諧に興じ、史談を語る。江戸の教養と明治の意気が交差し、大正リベラリズムの豊饒な受け皿になっていった。

下伊那青年会の機関誌『伊那青年』

主な執筆者を挙げれば、市村咸人（葎・佛骸）・上柳紅雲（緑）・太田幹・大崎呑州・奥村天籟・織田耕谷・北澤清香・北原阿智之助（痴山・芋作）・木下釣月・黒河内得堂・小林洋吉・近藤政寛（憑の里赤兵衛・赤人・星月夜）・鯤堂鵬州・佐々木陽齋（無事齋）・塩澤鳩峰・塩澤萬象・清水福一・下田淡村・鈴木覚次郎・橘露佛（邦道）・竹村米川・遠山乾齋・中島包州・中村七五郎・原稲太郎・樋口秀雄・樋口与平・平林岐水・前沢政雄（淵月）・丸山龍川・桃沢茂春・和田東山らがいる。

◎『夕樺』と、その背景

明治末期からのこう

した言論の熱は、大正期になっても持続した。

「信濃時事新聞」（大正4年8月～）、「飯田通信」（大正5年3月～）、『伊那公論』（大正6年6月～）、「飯田新聞」（大正7年10月～）、『天龍公論』（大正8年10月～）、『組合製糸研究』（郷土誌『伊那』の前身）、「飯田夕刊」（大正9年10月～）。「信濃大衆新聞」（大正15年2月）などのメディアが林立する。大正リベラリズムの波がこの地方にも確かに及んでいた。

そうした中で、中央の『白樺』の影響下に発した岡村二一らの短歌雑誌『夕樺』（編集発行人岡村二一、印刷人長谷川一郎、後に市橋甲一、当初は飯田印刷、後に信濃時事印刷部で印刷した）は、羽生三七、長谷川喬村（飯田印刷所支配人）、桑原郡司などを輩出し、盛時会員300人を擁した。

よりリベラル色の強い一派は、自由青年連盟の機関誌「第一線」（編集兼発行人林武雄、月刊。大正12年4月～～13年5月まで7号。しかし3、4号以外はすべて発禁。発行所第一線社）や「政治と青年」（大正13年9月～発行兼編集人は1号から6号まで山田精一、7号から34号まで北原亀二、実際は精一の兄で元信濃時事記者の山田阿水（亮一）だったと思われる。印刷は10号まで銭屋印刷所、それ以降が民友社活版所。民友社は大正13年9月のL.Y.L事件以来、職を失っていた同志を救済するために、水野正勝、清水玄三郎らが資金を出し合って開業した「政治と青年」直属の印刷所）に拠った。

自由青年同盟の機関誌『第一線』

これに対して、保守側は、国民精神作興会（大正13年10月～）の機関誌『作興』（大正14年11月～、発行人は森本洲平。山下印刷所・五十君印刷所）による青年たちの左傾阻止・思想善導に必死だった。

さらに大正15年2月には「信濃大衆新聞」（編集発行人倉田博雄）創刊。「第一線」「政治と青年」の廃刊を受けて発行された新聞であった。

◎L.Y.L.事件以後

L.Y.L.事件以来の思想弾圧の中で、青年の自由主義思想は文芸という隠れ蓑の下に拡散していったようにも思える。

大正15年5月雑誌「猫柳」創刊（猫柳詩社。飯田伸、和地清、龍口荘然、宮沢紫水ら。～9号以降は不明、印刷は大阪）、同じ年「白虹」が創刊。横田文子を中心とする飯田高女内白虹社刊の記載がある。

横田文子は地元紙記者を経て上京、後に「白日の書」が昭和11年第3回の芥川候補となった女流作家であるが、高校時代から目立った存在であった。

昭和3年11月横田文子が編集兼発行人となって「女人文藝」が創刊される（～昭和6年4月の11号で廃刊）。発行所は女人文芸社で、住所は箕瀬の芥川君代方になっている。菅沼百合子、岡島照枝、岡田きみ、岡田ふみ、伊谷富貴子、前沢汎、松下米子などが参画した。

昭和4年6月、『総合藝術』第1輯が刊行される。編集発行人は田中幸雄が兼任。印刷所は飯田雑誌社印刷部。発行所は飯田町荒町正念寺にあった総合芸術協会で、その機関誌的位置づけになる。

同年9月には「獅子吼」が、下伊那郡雄弁連盟の機関誌として創刊された。編集及び発行人は塩沢栄三。塩沢は昭和13年森本洲平の依頼で下伊那郡誠心作興会のイデオローグをまとめた『伊那思想史稿』がある。同人には、小菅紫水、堀中馬、塩沢栄三、座光寺久男、小原喜一、川合章元、村澤義雄、平田亀雄、原清司らの名前がみえる。印刷は木下活版所。

盛衰淘汰を繰り返しながら言論界も依然活発だ。

猶興社創立趣意書と、機関誌『作興』

昭和3年1月「信濃産業新報」は当初「かいこ」の題名で創刊。発行所は飯田市荒町のかいこ社。編集発行人は中島三郎（後の「南信時事」社長。～16年3月。創刊号は不明。5月「天龍蚕糸」に改題。13年1月に「信濃産業新報」へ改題）。

昭和6年2月には、下伊那の政友会の機関誌『深山政友』（印刷は岩島印刷所）発行。同

年には「飯田ニュース」（編集印刷・発行人は西川寛之助）が創刊されている。

昭和7年には週刊「信濃国民新聞」が創刊された。この新聞は反資本主義、反共産主義の立場に立ち、合わせて政党政治も、ファッショ的独裁も否定した、天皇中心国家史観の新聞で、主筆中原謹司、発行人北村栄一。87号まで出して「信州郷軍」に継続された。

その頃、中国大陸では、昭和6年9月には柳条湖事件に端を発した満州事変が勃発しており、軍部の独走から日本が日中戦争・太平洋戦争へと歩み出した時節であるが、そうした暗雲を孕みながらも、昭和8年2月の「教員赤化事件」で冷や水を浴びせられるまで、昭和初期の日本は文化的には、この谷襞の小都市でさえも大正リベラリズムの豊かな結実を謳歌していた。

◎山村書院の仕事

その一端を、昭和7年9月小林郊人著『伊那俳句集』を皮切りに、昭和18年に35歳の若さで腸チフスで急逝するまでの12年間に100冊近い書籍を出版した山村正夫にみることができる。山村は、飯田銀座通りの書店文星堂の書籍販売員を経て、昭和5年、伝馬町専照寺脇に小さな書店山村書院（信濃郷土出版社）を構え独立、本格的な出版事業に乗り出した。

昭和6年の暮れ、小林保一（郊人）著『飯田縁日史』（印刷人中島三郎・印刷所天龍蚕糸社）が発刊されてはいたが、『伊那俳句集』以降、郷土史家や教師たちの応援を得た山村の独壇場の観さえある。

山村の没後十年を機に村沢武夫の編んだ追悼集『山村正夫君を偲ぶ』（下諏訪・甲陽書房刊）に詳しいが、その主な刊行物は以下の通りである。

井深勉『山と渓』、今井源四郎『近世郷土年表』、小林郊人『萬象遺稿』『伊那農民騒動史』『波合のしるべ』『後藤三右衛門』『蛛栖何頼』『南宮峡』『山口不二傳』

小林郊人『伊那農民騒動史』と『山郵』など

他、平栗士行『猪山句抄』、岩崎清美『伊那の伝説』、前沢淵月『一茶はうたふ』『一茶句話』『捕虫網』『赤石嶽』他、下平政一『文化文政の頃』、下伊那教育会編『下伊那の特殊産業』『下伊那の地誌（浪合平谷根羽）』、柳田国男『信州随想』、村沢武夫『伊那歌道史』『信濃文化発達史』『信濃の傳説』他、井沢練平『清浜遺稿』、下久堅小学校『文永寺史』、今井白鳥『飯田のおねり祭1』、北原痴山『伊那名勝志』、伊藤傳『烈女不二新曲』『信濃宮御詠と史傳』他、牧内武司『下伊那郷土民謡集』、日下部新一『黒田人形』『木曾のお傳馬』、山田居麓『日樹上人』、向山雅重『山村小記』『続山村小記』『遠山奇談』、折口信夫『古典の研究』、下伊那神社協会『伊那の御祭神』、その他、市村咸人校訂の『信陽城主得替記』『伊那神社仏閣記』『熊谷家伝記』『中馬一件文書』他、郷土資料集成や市村咸人全集に収斂していく一連の著作なども出版している。

山村はもう一つの仕掛けをしている。昭和9年9月に発刊した雑誌『山郵』（信濃郷土出版社・山村正夫、昭和13年4月の第5号まで）の創刊である。巻末の広告には山村書院の「発売書目」があり、民俗関連の30種以上の書目が並ぶ（印刷社は原田増蔵の研究社）。同人には、市村咸人、井上福実、武田彦左衛門、中島繁男、熊谷勝、熊谷天明、牧内武司、後藤兵衛、杉山愛山ら郷土史家など執筆陣の名前が確認できる。

今もなお郷土研究の基礎資料として生き続ける、これだけの蓄積に圧倒されるが、そのエネルギーを一気に出版という形で吐き出させることがまるで使命だったかのように、山村は太平洋戦争開戦までの昭和初期、太く短く生きた。

◎統制下の苦悩

昭和12年11月に林栄（若松屋）によって『はたの友』が創刊された。同誌は翌13年11月『伊那』に改題し、15年9月にその経営が山村書院に移される。創刊号

『組合製糸研究』（S.4.9）と戦前の郷土誌『伊那』（S.13～17）

から3年間が林の手で編集・発行されたもので、当初は熊谷印刷所で印刷していたが、「伊那」の経営・編集を山村正夫が引き継ぐと共に、印刷所も熊谷印刷から（印刷所の統廃合の影響か）原田増蔵のいる南信印刷株式会社に代わる。先に昭和13年4月に第5号を出したままの『山邨』を『伊那』と経営統合しより強固な郷土誌にしようとした意図が見える。

しかし、昭和14年から始まった新聞の強制統合も昭和17年5月には1県1紙となるなど、紙や印材の配給が入手が思うようにならなくなり、印刷業者は自発的な転廃業を迫られていた。

こうした状況下、17年6月には『伊那』に「休刊宣言」が掲載されるがなぜか継続され、翌18年6月山村正夫の急逝後の10月、突然、休刊になる。

その年11月28日には、売上高・用紙の使用量、地理的配置を調査し、組合内申も加味して、県の組合と担当官庁が検討して継続する業者が発表されたが、そこに南信印刷や研究社の名前はない。企業整備対象者は日を決めて、印刷機・活字等一切を供出（買上）し廃業。残存業者も19年2月末日までに一部活字（初号・変体活字）、手フート、ミシン器を供出させられ、戦時体制の業界整備は終了した。

◎「南信州」の印刷出版事業について

1　皇太子ご夫妻の伊那谷訪問を契機に

戦後の騒擾の中で、前身の新聞の号数を引き継ぎ、昭和29年10月2日付「南信州」紙が発刊された。印刷事業は、新聞の経営が軌道に乗ってくる10年後の昭和39年出版印刷局が新設され、事業が始まった。しかし、武士の商法というか、本業が新聞という意識が強く、印刷環境、人材や納期も含め、新聞発行の片手間という観が否めずなかなかお客様のニーズを満たすというところまでいかなかった。気息奄々事業を継続していたというのが実情だった。

その事業が一気に飛躍するのは、昭和44年8月26日の皇太子ご夫妻の伊那谷訪問が契機だった。新聞に報道された直後から仲睦まじい皇太子ご夫妻の写真を求める問い合わせが相次いだ。すぐさま、新聞社の強みを発揮した同行取材による写真集『伊那谷の皇太子ご夫妻』の刊行が検討されたが、写真印刷の質を確保する印刷環境も自社ではおぼつかなく、紙などの資材調達もままならない。様々な条件をクリアし、当時の状況下ではまさに清水の舞台から飛び降りる覚悟で、「採算割れを覚悟で初版３０００を決めた」と、当時、記者兼印刷担当だった関谷邦彦（現社長）は振り返る。

同年9月20日発行B5横判約40頁の冊子だが、丁合や製本は社員を総動員しての作業だった。増刷に次ぐ増刷で、結局2万５０００部を捌いた。その利益で「はじめて世間並みのボーナスが支払え、多少とも印刷局に対する社員の意識も変化した」（関谷）。当時の最新機種だったB半裁印刷機である「フジ16」を導入、本腰を入れて印刷事業に取り組む体制を構築していった。

2　3つの柱～郷土資料を中心に

昭和40年代に入ると、飯田下伊那地域も、三六災の復興景気を弾みに遅ればせながら、高度経済成長期の波に乗った。

もともと歴史と文化に関心の強い土地柄であり、勉学欲の旺盛な地域だけあって、「飯田文化財の会（当時代表大沢和夫）」会員が「南信州」紙にリレー執筆したコラム「郷土のたから」を、『郷土の百年』（43年8月）、また早世した俳人久保田創二遺稿集『聖夜の燭』（飯田新人俳句会・42年）なども手がけていたが、前述の写真集が契機となり、以後、矢継ぎ早に自費出版を中心に出版を扱うようになった。

飯田文化財の会関係では、『郷土の百年』第二号（44年11月）に続き、『郷土のたから』（上下巻）『飯田の文化財（写真集）』（ともに46年）、『第二次世界大戦の頃』（47年）など一連の歴史記録物である。

郷土資料は何千部を望める出版物ではないが、地域が地域の誇りを涵養するには不可欠のものであり、小社が新聞社として印刷出版を事業とする核として、現在まで続いている。『絵馬奉納額を尋ねて』（平成12年）、後藤総一郎・明治大学ゼミ『飯田・新聞雑誌発達史・郷土百年のジャーナリズム』（平成9年）『地域史に貢献した人々』（平成20年）、最近では飯伊地名研究会の『伊那谷地名』1・2（平成20・22年）などのコラムの単行本化がそれ

爆発的ヒットとなった昭和44年の本

久保田創二『聖夜の燭』

龍江の名物村長・木下仙の日記

文化財会とのタイアップ・シリーズ

地域の歴史や文化関係の本

にあたる。

またこれとは別に、二本目の柱となるのが、個人による研究や活動、思索の出版である。これらは地域活性化の重要な要因と捉え、積極的に出版を応援してきた。佐々木五郎氏の『親と子の育ち合い・相談室だより』（56年）『長い目で見る』（59年）などの教育活動、また今村輝男氏『伊那谷の巡礼』（54年）、村沢武夫氏『飯田の花火』（56年）『飯田情話』（58年）など郷土史研究、久保田安正氏の『伊豆木の殿様』などの小笠原氏と伊豆木関係の著作、さらには松澤太郎氏の『風越山の麓から』『野菜の花』『読書雑記』『道草』『草もみじ』『下萌え・冬のこぶし』『蕎麦談義』『人形劇の町・飯田』など一連の著作。

これらと相俟って、歌集・句集・自分史や団体や企業の記念誌（周年史）なども貴重な地域の記録となるはずである。

三本目の柱というか試みは、弱小ではあるが地域紙であるとの自覚から、創立40周年には「伊那谷童話大賞」を設立、82銀行やスーパー・キラヤ、子ども服のマルタなど地域企業の後援を受けて10年間にわたって地域発の童話コンテストを開催、受賞作を出版し続けた。全国からの募集が500通（点）を越え、知名度も上がった。このコンテストをステップに全国へ羽ばたく児童文学作家も輩出した。

一定の役割を終えたと判断して、平成20年には、有志の方々と一緒に「一般社団法人南信州地域資料センター」を立ち上げ、新たな試みとして〝捨てないで！〟の活動を通して、地域資料の収集・保管・整理により鮮明な形で関わっている。（嶋）

久保田安正氏の本

10年間続いた伊那谷童話大賞

郷土の歴史を記録したい

松澤太郎氏関係の本

郷土の歴史を収集・保管・記録したい